



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

News Letter

第55号 2011年6月10日
発行：日本青年心理学会事務局

■ 目次

後藤宗理：東日本大震災にあたって

<特集> 映画・音楽・小説等を青年心理学的に解釈する，または青年心理学の講義で取り上げる

網谷綾香：映画・漫画に触れることの情緒的体験

家島明彦：マンガ×青年心理学—マンガ読者としての現代青年の発達—

高坂康雅：映画『魔女の宅急便』にみる青年期の自己内対話

恒吉徹三：『西の魔女が死んだ』にみる「自分らしさ」の発達と“new object”の果たす役割

都筑 学：生きた教材を活用して青年心理学を発展させる

山岸明子：文学や映画を青年心理学の講義で取り上げる

<書評>

大野 久：溝上慎一著『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ—』

下村英雄：浦上昌則著『キャリア教育へのセカンド・オピニオン』

<広報>

都筑 学：研究委員会報告

事務局からのお知らせ

東日本大震災にあたって

理事長 後藤宗理

東日本大震災で犠牲となられた皆様のご冥福をお祈りいたします。

また、震災で被災され、不自由な生活を送っておられる皆様のご苦勞に敬意を表したいと思います。被害の詳細が明らかになるにつれ、被災された皆様に対して私たち青年心理学会会員がどのような支援ができるのかを日々問い続けています。

とりわけ卒業・入学時期に重なった今回の震災では、中学生・高校生・大学生というまさに青年期の真ただ中にいる若い人たちが、将来の進路を遮られ、また将来の夢を断たれています。また、勤勞青年も被災ばかりか職を失うなど大きな困難に直面しています。こうした現実に、青年心理学を研究・教育しているものとして、大変心が痛みます。

私たち一人ひとりがこの現実に直面して何ができるのか、次世代を担う幼な子や青年たちに何を伝えていくことができるのか、一緒に考えていくことが大切ではないかと思っています。

20世紀初頭に社会の変化に伴って、青年期が注目されてきたことはよく知られていること

ですが、青年たちが社会の変化に翻弄されていることから目をそらすことはできません。青年心理学会会員の皆様のご教示・ご支援をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、今年次大会で会員の皆様にお目にかかれることを楽しみにしております。

＜特集＞映画・音楽・小説等を青年心理学的に解釈する， または青年心理学の講義で取り上げる

青年期の直中にある学生に青年心理学の講義をしていると、ふと今講義をしている青年心理学は、現代の青年像や青年の心情を映し出しているのだろうかと思うことがあります。青年が青年心理学の講義を聴いた時、何を思うのだろうかと考えることがあります。

今回の特集では、映画や音楽といったものを青年心理学的に解釈するとどのような解釈になるのか、また生きた教材を講義の中でどのように位置づけ、活用していくのかということに焦点を当て、研究において、また講義の中で活用されている先生方からのご意見をうかがいました。

非会員の網谷綾香先生、恒吉徹三先生からもご寄稿いただき、内容の濃い特集となりました。ご寄稿いただいた先生方、誠にありがとうございました。

(担当：渡邊照美・小沢一仁)

映画・漫画に触れることの情緒的体験

網谷綾香（佐賀大学文化教育学部）

30歳になりようやく佐賀での就職が決まったその年の暮れ、映画好きの父とふたりコタツに入り、佐賀を舞台にした映画「張り込み」(1958)を観た。クライマックスで、高峰秀子演じる婦人の内に秘めた激情に触れ、心揺さぶられながら、「ああ、私もこういう映画が分かるようになったんだな…」と、青年期をようやく抜け出しかけている自分自身を実感したものであった。

精神分析学会の教育セミナーにおいては、10数年にわたり「映画で精神分析を学ぶ」試みが行われている。このセミナーは映画の潜在的なテーマを解釈していく場でもあるが、単に分析的視点で鑑賞するだけではなく、主人公に感情移入することで自分の内面に存在する空想やコンプレックスを体験し、自分がどのような空想を投影しがちか、自分がどのようなテーマに心的距離がもてないのか（逆に心的距離を取ろうとするのか）といった点を洞察するきっかけを与える場でもある。

現在、私は教員養成系学部で教育臨床やカウンセリングに関する講義を担当しており、各講義中、1本は映画を鑑賞する機会を作り、また、漫画もしばしば教材として扱う。今、気にしている教材は、映画『マイ・ガール』、映画『ラースと、その彼女』、漫画『彼氏彼女の事情』などである。例えば『マイ・ガール』では、少女の対象喪失や前思春期のテーマ、父と娘の葛藤などを取り上げ、『彼氏彼女の事情』では、“本当の自分”とはなにか?について取り上げる。これらの作品は、元々は臨床心理学や発達心理学の諸理論や児童生徒の心理について学生により深く理解させるための教材として用意したものであったが、扱ってみると学生は主人公に感情移入し、自分自身の思春期・青年期的な心理的課題や葛藤に重ね合わせながら作品を鑑賞することが分かった。そこで、これらの作品を“どう解釈するか”という視点と同時に、作品に触れて“どのような感情が沸き上がってきたか”にも焦点を当て、時間があればグループディスカッションもさせている。ディスカッションには、他者の意見に触れることで、より自分自身の心の動きを意識化させる効果もある。

映画や漫画を通して情緒的体験をしながら心理学を学ぶことで、「知識や理論がストーンと心

に落ちた」「心で実感できた」という体験を報告する者も多く、「今まで何となくもやもやしていた気持ちに、整理がついた」など、健康な青年の自己洞察を促進させる効果もある（ただし、一部の学生には情緒的刺激を強く与えすぎるケースもあることから、作品の選別や鑑賞に関する事前予告の配慮も重要であることを申し添えたい）。

最後に、『マイ・ガール』鑑賞後の女子学生の感想をひとつ紹介しよう。「何もかもがハッピーエンドというわけではないし、消えない哀しみはあるけれど、確かに主人の心の成長が表現されていて、胸が熱くなった。私も何かを喪失しながら何かを得て、成長していくのかもしれない」。

マンガ×青年心理学—マンガ読者としての現代青年の発達—

家島明彦（島根大学キャリアセンター）

本稿ではマンガを青年心理学の講義で取り上げる意義とその方法について簡単に述べる。結論から言えば、現代青年が多感な思春期・青年期に接している主要メディアのひとつはマンガであり、現代青年は自覚している以上にマンガから多くのことを学んで成長している。幼少期からマンガで育った現代青年は、良くも悪くもマンガ的な感覚や感受性を身につけており、「ガーン」（ショックを受けた時）や「シーン」（誰も返事をしない時）などのオノマトペで身体感覚を表現することすらある。マンガと現代青年の発達の関連は深く、取り上げる意義は少なくない。また、その方法も多様である。マンガを授業で扱うことによって、学生の集中力が高まったり理解が深まったりすること以上に、学生自身の自己理解が促進されたり、現代における青年の特徴・傾向が見えてきたりすることが期待できるであろう。なぜならば、マンガは基本的に雑誌連載形式であり、人気を獲得できなければ打ち切りになってしまうという性質上、その時代の読者（青年）の理想・期待・趣向などがマンガに色濃く反映されている可能性が高いからである。

日本のマンガは、その独特の表現形式や物語展開によって多くの読者（特に青少年）を魅了してきた。そのルーツは平安時代の絵巻物にまで遡ることができると言われており、マンガの魅力や発展の歴史についても多くの文献がある（ここでは紙面の都合上、割愛）。日本におけるマンガの人気は、今更述べる必要もないだろう。販売部数に関して言えば、出版物全体の約4割がマンガであるし、初版部数の日本出版界最高記録は人気マンガ『ONE PIECE』（尾田栄一郎、集英社）によって現在も更新され続けている（第60巻が初版・実売ともに300万部を超えたというニュースは記憶に新しい）。立ち読みやマンガ喫茶、インターネット上に流出した画像の閲覧なども考慮すると、日本のマンガ読者の数は計り知れない。日本の大学生の9割以上が小学校卒業までにマンガを読み始めていたという調査結果もある（家島、2009b）。実際、日本にはマンガを介して自己形成をしてきた青年が少なからず存在している（家島、2008a, 2008b）。

マンガで育った青年は日本だけでなく海外にも増えてきており、マンガ読者としての青年を扱う研究は、今後の発展が期待されている。近年では、インターネットの普及や画像処理ソフトの性能向上によって、人気マンガの原稿が勝手に各国の言語に翻訳されてウェブ上に出回るといった問題も生じている。スキャンされ、翻訳され、違法にアップロードされた日本マンガの海賊版は、スキャンレーション（scan+translationの造語）と呼ばれており、紙媒体の販売よりも早く、無料で、俗語を含んだ若者感覚に近い翻訳で読めることから、海外青年がマンガを読む際の常套手段となっている（家島、2009a）。

経験則だが、このようにマンガ読者としての青年の発達について講義をする時、学生の反応は非常に良い。

【引用文献】

1. 家島明彦. 2008a. マンガを介した自己形成支援プログラム作成に向けて. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 98-111.
2. 家島明彦. 2008b. マンガの影響と自己形成. 榎本博明(編)『自己心理学② 生涯発達心理学へのアプローチ』金子書房 (pp. 204-205)
3. 家島明彦. 2009a. 海外における日本マンガ事情と多文化横断的研究の可能性. 日本心理学会第73回大会発表論文集, 82.
4. 家島明彦. 2009b. 現代青年がマンガを読む契機, 時期, 動機に関する日米比較. 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集, 1084-1085.

映画『魔女の宅急便』にみる青年期の自己内対話

高坂康雅 (和光大学現代人間学部)

青年期は、自己に気づき、自己に対する問いを抱き、自己と対話する時期である。しかし、自己への問いや自己内対話について講義をすると、具体的なイメージが湧かない学生が少なからずいる。このような学生に自己内対話について具体的なイメージをもってもらうために有用なのが、映画『魔女の宅急便』である。

映画『魔女の宅急便』は13歳になった魔女の娘・キキが、一人前の魔女になるため、黒猫のジジとともに、よその街で一年間修業をするというストーリーである。映画の中盤で、キキが魔女の力(空を飛ぶ能力、ジジの言葉が理解できる能力)を失い、苦悩しているときに、以前知り合った絵描きのウルスラの家に泊まりに行くシーンは、まさに青年期の自己内対話を的確に表現している。まず、キキとウルスラは同じ声優(高山みなみ氏)である。またキキとウルスラの対話は、深い森の奥にあるウルスラの家で、周囲が真っ暗になった夜、ランプの明かりのなかで行われる。このシーンは、青年が、暗い自室で自分に何かを問いかけている様子を彷彿とさせる。このシーンでウルスラは「それまでの絵が誰かの真似だってわかったんだよ。自分の絵を描かなきゃって。」「少し前より絵を描くってことがわかったみたい。」と言う。「魔女の血、絵描きの血、パン職人の血。神様か誰かがくれた力なんだよねえ。おかげで苦勞もするけどさ」と続ける。一方、キキは、「私、魔法って何かって考えたこともなかったの。」と言う。魔法について無自覚なキキに対して、ウルスラは絵を描くことに対する自覚や苦勞、苦悩を語る。ウルスラは自分のことを語りながら、キキに魔法について考えることを促しているようにも見え、キキも静かに魔法について考えているように見える。ウルスラの語りは、押しつけでも激励でも説教でもない。全面的な受容と共感をもって、キキの自己への問いに対する思考を深める語りである。

この対話のシーンののち、有名なデッキブラシで飛ぶシーンに進んで行くわけだが、デッキブラシで飛ぶ時、キキは初めて「飛べ」と言う。魔法を意識化し、魔女である自分を自覚した瞬間であり、ウルスラとの対話(自己内対話)が、キキをそうさせたのだと思われる。このようなキキの姿をみて、学生にも、無意識的なものを意識化し、無自覚なものを自覚化するような自己内対話をしてもらいたいものだと、常々思っている。

映画『魔女の宅急便』には、キキがジジの言葉がわからなくなるという最大の謎がある(著者なりの答えはあるが)。また原作の最終巻(第6巻)では、キキはトンボと結婚し、一男一女をもうけ、女の子は魔女の修行に、男の子は自分探しの旅に出るといふ、キキが見送る立場になっている。これについても、色々と思いをめぐらすことができる。『魔女の宅急便』について、学生や研究者の先生方と大いに語ってみたいものである。

『西の魔女が死んだ』にみる「自分らしさ」の発達と“new object”の果たす役割 恒吉徹三（山口大学教育学部）

社会の中で人が生きていくには、少くも他人に合わせる必要がある。けれど、合わせ過ぎると「自分がない」と悩み、自分を押し出しすぎても周囲から「浮いている」と悩む。特に青年期は「自分らしさ」の悩みは尽きない、と言葉で説明するより『西の魔女が死んだ』（監督：長崎俊一）を観るか原作（梨木香歩）を読むのがよい。授業で紹介すると、「心理学と関係あるとは思わなかった」「これからは意味を考えながら映画を観たい」「授業がよくわかった」などの感想が出る。この映画には、友だちに合わせ過ぎて自分を見失って不登校になった女子中学生の「まい」（高橋真悠）が、『西の魔女』と家族の間で呼ばれている祖母（サチ＝パーカー）との暮らしを通して、自分を取り戻していく過程が描かれている。そこで、「自分らしさ」の発達について、恒吉（2008）と重なる部分もあるが、ここでは特に両親とは異なる立場の理解者としての祖母、つまり“new object”としての祖母の果たした役割に焦点をあて、その幻滅と修復過程について述べてみたい。

主人公のまいは、祖母の家に預けられ、魔女になるために規則正しい生活をし、精神を鍛える「基礎トレーニング」に励む。自分で決めて最後までやりとげることが大切で、日課も自分で組む。洗濯をし、野イチゴを摘んでジャムを作り、人任せではない生活をする。ある夜、祖母に、人間の死後について尋ねる。父親は、人が死んだら何も残らず、他の人も変わらない生活をする、と答えたことも話題になる。この問いかけには、青年期に特徴的な孤独感や自分の存在が不確かな不安を読み取ることができる。この不安を、最初祖母はしっかりと受け止め、まいは元気を取り戻す。そんなある日、近所に住む無骨なタイプの男性ゲンジさん（木村祐一）が、まいが大切にしている場所に勝手に入って土を掘り返す。これを見たまいは、怒りでいっぱいになって帰宅し、祖母に向かってゲンジさんを罵倒する言葉を吐く。祖母は、なだめられずにまいについて手をあげてしまう。これをきっかけに祖母との間にわだかまりが生じ、別れの挨拶もないまま、まいは自宅へと帰る。

この祖母との暮らしの中で、自らが生活を構造化し、家の中でも何らかの役割を果たし、主体性や自律性、つまり「自分らしさ」を獲得していく。この過程を支えているのは、寄り添いながら親とは異なる視点からものを言う“new object”としての祖母の役割である。ところが、この成長促進的な役割はいつかは破たんする。それが、まいの気持ちを受け止められずに祖母が手をあげた瞬間であり、両親と同じ大人としての祖母の一面にまいが直面し祖母に幻滅した瞬間でもある。お互い言葉も十分交わさないままに他界した祖母との関係を、どのようにして修復するかがまいの発達課題である。この点を映画の結末はうまく描き出していると私は思う。妥当な理解かどうか、それに結末はぜひ映画で観て欲しい。

生きた教材を活用して青年心理学を発展させる

都筑 学（中央大学文学部）

私の研究テーマは時間的展望である。そのせいだろうか、「未来」「希望」「時間」という言葉に対する閾値が非常に低い。そういう単語が聞こえてくると、すぐにピピッと反応してしまう。2009年12月31日の紅白歌合戦のときも、そうだった。番組のテーマは「歌の力」。なかなか面白い構成だった。実に久しぶりに、最初から最後まで全曲聴いたものだ。心に沁みしたのは、アンジェラ・アキの「手紙 拝啓十五の君へ」、いきものがかりの「Ye11」など。

その他にもいい歌があった。聴きながら、身震いしていた。

そうした曲に共通しているのは、人の優しさだ。横に立って、そっと肩に手をやりながら、声をかける。「うまくいかないことが多いよね。お互い苦しいことも多いよね。でも、いっしょに歩いていこうよ。少しずつでもいいから、ちょっとでもいいから」。そんな雰囲気が漂ってくる。大声で叱咤激励したり、元気に生きていくことを強制したりしない。そんなさりげなさが、心にじんと沁みてくるのだと思う。

「歌は世に連れ、世は歌に連れ」と言われる。時代とともに、歌も変わる。私が青春時代を過ごしたのは1960～70年代だ。その当時、「涙を超えて」という歌が大いに流行った。これを、授業中に学生に聴かせたことがある。そのときに、学生の一人が言ったものだ。「歌詞があまりに明るすぎて気持ちが悪い」。実に率直な感想だと思う。「小さなことで悩むなよ。前を向こうぜ。どンドン行こうぜ。僕らの未来は無敵だ」。そんな雰囲気の歌詞を聴いても、今の若者には絵空事のように思えてしまうのだ。

歌は世に連れて変わっていく。では、私たちが講じている青年心理学は、いったいどのようなのだろうか。世に連れて青年心理学は変わってきているのか。それが問題だ。授業で用いているテキストが描いている青年像はどうだろう。授業で青年心理学を語るときの、私たちのスタンスはどうだろう。青年に対して、大人目線で見えてはいないか。青年の心情から遠く離れた物言いをしてはないか。そんなふうにして、自らの日々の教育的営みを問い直してみる。これは青年心理学者にとって重要な課題であろう。

授業中に映画・音楽・小説・ドラマを用いること。それは講義の間の単なる息抜きではない。わかりやすい具体例を示すだけでもない。そこに描かれている青年の姿をもとに、青年心理学における人間像を相対化することなのだ。そうした生きた教材によって、青年を社会や歴史の中で捉える視点が確実なものとなる。グランドセオリーなき時代と言われて久しい。映画・音楽・小説・ドラマの中にある青年の生き方を、青年心理学の理論と重ね合わせてみる。そうした行為を積み重ねていく。それが、21世紀における青年心理学の構築への第一歩となるにちがいない。

それはまた、自らの研究姿勢を問い続け、立ち位置を考え直すことでもある。青年とともに歩む大人とはどういう存在であるべきか。最近上梓した『今を生きる若者の人間的成長』（中央大学出版部）は、そういう思いを込めて書いたものである。今後も、こうした問題意識にもとづきながら、青年心理学の発展に寄与していきたいと思う。

文学や映画を青年心理学の講義で取り上げる

山岸明子（順天堂大学スポーツ健康科学部）

20年以上、看護学生に「発達心理学」の講義をしてきた。看護を目指す学生たちの中にも発達心理学に関心をもつ者はいるが、看護に直接役立つ講義ではないし、実践的で生死にかかわる心うつトピックも多い看護領域とは異なるため、多くの学生が興味をもつ講義をするのはなかなか大変だった。色々なことを試みたが、彼女たちが一番興味を示し夢中になった講義は、「スタンド・バイ・ミー」の視聴とその解説だった。

中学に入る直前の4人の少年たちが親にウソを言って死体探しの冒険に出かける2日間の出来事を描いたスティーブン・キング原作、ロブ・ライナー監督制作の有名な映画。この仲良しグループがまさに児童期のギャング集団で、自分たちだけの秘密の隠れ家で遊び、大人ぶってタバコを吸ったり、禁じられたことをしたり「小さな悪」を共有する。そして社会的に認められる共通の目標（「死体を見つけてテレビにでる」）に向かって仲間と協力して達成しようとする—これは児童期の発達課題「生産性」といえる。児童期の少年らしくふざけ

たりけんかしたりしながら、一方で相手のことを自分と同じように大切に思い、傷つけられた相手を慰めたりして、前思春期の友情（チャム）の素晴らしさが描かれる。親との問題をかかえた少年たちだが、親からの愛を求めていること、父親に同一視して父親の価値観をそのまま受け入れていることもわかる。

児童期から前思春期の問題が実にうまく描かれていて（作家および監督の人間を見る目に脱帽！）、学生は自分の当時のことを思い出したりして感動しつつ、発達過程もしっかり理解するようで、テストでもこの時期の正解率は視聴以来いつも高い。

青年期に関しては、自我同一性の説明に村上春樹の「ダンス・ダンス・ダンス」を紹介したりしている。「まともな定職もなく、社会的には完全なゼロ」の主人公。「人と変わっているのは名前だけ。後は何もないの。私なんてないも同じだわ。私は失われているの」と呟く恋人。恵まれた生活を送っているのだが、「主体的に何ひとつ選択していない」ために存在感を感じられない友人の五反田くん。同一性感覚をもつためには、社会の中に位置づけること、独自性の感覚をもてること、主体的・能動的に選択した自分であることが必要であるということの実例である。荒れた高校生を描く豊田利晃監督の「青い春」も同一性拡散状態の心理と、その状態に耐えられず否定的同一性を選んでしまう青年が描かれていて、同一性拡散の説明に役立っている。

なお上記の他にも様々な文学作品や映画を事例として示しながら、発達過程を論じる教科書を執筆したので、参考にしていただければ幸いです（「こころの旅－発達心理学入門」新曜社 山岸明子著 2011年6月刊行予定）。

<書評>

溝上慎一著『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へ－』

（有斐閣、2010年10月刊、本体1,800円）

大野 久（立教大学現代心理学研究科）

青年心理学はスリリングな学問であると書いたことがある。その理由は、研究対象が青年であり、卒論や修論の場合、研究の主体も青年であり、さらに、それを講義する相手も青年だからである。「青年期の心理の特徴は～」と話し、「先生、僕たち違います」と青年自身から言われてしまう悲喜劇の可能性を常に内在している。そのために、常に「今の」青年の実態に接近するためにあらゆる機会を利用して情報収集に（乗り遅れないように）務めている。

こうした過程で、次の世代が青年として次々に出現し青年は常に更新され、その結果、世代ギャップは広がる一方であることに気づかされる。我々（50歳代研究者）は、ツイッター、ミクシー、ニコ動、スマホを知らず、現代青年たちは、終戦（私も知らないが）、学生紛争、高度成長期、バブル崩壊を知らない。しかし、一方で、生涯発達の中での青年期という共通の心性を持ち、個々の人生を生きているということもまた真実である。それぞれの時代の世代性と、発達の共通する青年性の両方を理解することで、さらにはその個人の個別性を理解することでより現実的な青年期への接近が可能になる。

こうしたことを感じていた中で、溝上慎一氏著『現代青年期の心理学』が出版された。良書である。本書は第1章「青年期とは」から始まり、第2章の「青年期の誕生」から、第5章の1980年代までの時代背景とその中で生きる青年の特徴をさまざまな角度から分析している。広範な資料や知識が駆使され、分析も的確である。それぞれの時代とその時の青年期の心理の必然性が説得力を持って語られている。その後第6章「課せられる自己形成」さらには第7章「現代青年の青年期の過ごし方」と、現代青年の現状の分析

と人格形成における問題へと論は進む。本書が単なる平板な歴史の紹介に終わらないのは、溝上氏の「青年心理学は青年にポジショニングして彼らの発達を上（大人）に向けて考える学問」(p. 19) という主張による。青年心理学が単に現状記述の学問ではなく、青年に関してある教育的視点、と言わないまでも、青年に共感し成長に資する情報提供をすべき学問であると考える筆者自身も、この主張に関しては大いに賛同するものである。

さらに、溝上氏がかねてより主張し、また、本書の中心概念でもある自己形成におけるアウトサイドイン、インサイドアウトという考え方も、こうした時代の変化とその中の青年期のあり方の分析と、青年の自己形成を促す方向性という両面から考えて納得できる主張である。社会を背景とし、より個人の生き方に接近するという溝上氏が模索されている方向性への研究の発展を祈るとともに、青年心理学研究者に大いにお勧めする研究書である。

浦上昌則著『キャリア教育へのセカンド・オピニオン』

(北大路書房, 2010年7月刊, 本体1,900円)

下村英雄 (労働政策研究・研修機構)

未曾有の大震災とそれに伴う原発事故に関する国民的な議論の中で、われわれはセカンド・オピニオンの必要性というものを、分かりすぎるくらいに分かってしまった。

今、日本では国をあげてキャリア教育を推進している。キャリア教育はあくまで良いことであるとされ、各方面で取り組みがなされている。だから、この分野の研究者は、仮にキャリア教育は有効ではないという研究結果が得られた場合でも、ではどうすれば有効になるのかといった方向で論を立てることだろう。何も悪意があつてのことではない。そのように研究を行う方が、結果的にキャリア教育の推進に貢献できると信じるからだ。しかし、その際、今あるキャリア教育はそもそも有効ではないのかもしれないという可能性は、いつしか「想定外」となってしまうている。

本書が何に対するセカンド・オピニオンなのかと言えば、こういう類の施策の推進および研究動向に対するセカンド・オピニオンなのだ。キャリア教育は有効だと言うが、それは誰にとってどのように有効なのか。現行のキャリア教育では、本来、考慮すべき「想定外」の前提が隠されており、そのことに無自覚なまま(あるいは十分に自覚しながら)、物事を進めてしまっているのではないか。だからこそ、今、キャリア教育にはセカンド・オピニオンが必要なのではないか。本書の前半部分は、浦上さんによる現行のキャリア教育に対する手厳しい批判・告発が綴られている。

本書の後半部分で、キャリア教育に対する具体的なセカンド・オピニオンが示される。キーワードは「社会性」と「個性化」だ。この2つのキーワードで、浦上さんがいかなるオピニオンを提示しているのかは、是非、本書を買い求めてお読みいただきたい。浦上さんの前半部分の舌鋒の鋭さは、後半部分の心根の優しさに裏打ちされていることが、きっとお分かりになることだろう。そして、常にあらゆる前提を取り除いて、オルタナティブなヴィジョンを丁寧に議論しておく大切さについても、改めて理解するはずである。

さて、本書に関しては、もう1つ言いたいことがある。青年心理学者である浦上さんが国の政策に関するオピニオンを社会に向けて力強く発表したことの意義についてである。私は、常常、青年心理学は、心理学の様々な分野の中でも、特に政策科学を志向しう分野であると考えてきた。青年の問題は、現在、社会的排除と包摂の問題として、おそらくかつてない

ほどに先進各国の社会政策の中心的な課題となっている。このような状況で、青年心理学者は、これまで以上に積極的に情報を発信し、世論を喚起し、政策提言を行うなど、よりパフォーマンスに活動することが期待されていると思う。

そういう意味で、本書は、これからの新しい青年心理学者の仕事のありようといったものも示している。青年心理学がもつ可能性をもっと追求したいと考える研究者にとっても、本書は必読の1冊であると思う。

研究委員会報告

研究委員会委員長 都筑 学

1) 研究委員会ワークショップ

以下のような内容でワークショップを開催し、わが国の学校教育の現状をふまえながら、中学生・高校生から大学生までの青年の発達を連続的なものとして把握することを試みました。2008年に青少年人間関係調査研究所がおこなった中学生・高校生の調査データ(4949名)にもとづいて、進学意識(学校卒業後の進学希望進路)の違いによって、学校生活や教師との関係、親子関係、地域との関係について、どのような違いが生じてくるのかを話題提供してもらいました。その後、研究委員を初めとして、会員外の方を含めて20名を超える参加者で活発な議論を繰り広げました。内容の詳細については、『青年心理学研究』に掲載されます。

テーマ：多様化する教育と青年の育ち —中学生・高校生から大学生までの発達を連続してとらえる—

日時：2011年2月19日(土) 午後2時～5時

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス・富士見校舎 ボアソナードタワー8階 0805教室

話題提供：加藤弘通(静岡大学大学院教育学研究科)

司会：都筑学(中央大学文学部)

2) 研究委員の交代

2011年度研究委員(○委員長)

浅野敬子(至学館大学)、天谷祐子(名古屋市立大学)、家島明彦(島根大学)、池田幸恭(和洋女子大学)、加藤弘通(静岡大学)、上長然(近畿大学豊岡短期大学)、高坂康雅(和光大学)、菊地則行(会津大学)、坂田浩之(大阪樟蔭女子大学)、○都筑学(中央大学)、山本ちか(名古屋文理大学短期大学部)、吉岡和子(福岡県立大学)

2011年3月で、以下の委員が任期満了で交代しました。長い間ありがとうございました。橋本剛(静岡大学)、松下姫歌(広島大学教育学研究科)、茂垣まどか(成城大学・非常勤)、宇井美代子(東京福祉大学)、梅本信章(盛岡大学)

【事務局からのお知らせ】

I. 2011年度大会について

本年度の大会(19回大会)につきましては、大会1号通信を同封していますので、ご参照ください。発表申し込みの締め切りは7月末、原稿締め切りは9月初めですので、円滑な受付・運営にご協力ください。参加申し込みは3号通信・大会論文集に予約参加の振替用紙を同封しますので、それ以降にお願いします。本田由紀先生による講演、小塩先生による共分散構造分析の講習会など、魅力的な内容です。お誘い合わせてご予約ください。

日時：2011年11月26日(土)～27日(日)

場所：文京学院大学本郷キャンパス（地下鉄南北線東大前下車徒歩すぐ）

II.学会事務の一部業務委託について

前号でお知らせしました通り、機関誌印刷を委託している（株）イセブ（つくば市）に学会事務の一部を本年度より委託しております。このニューズレターの発送はその最初の委託業務として行われました。お気づきの点などありましたら、事務局宛てにお聞かせください。

III.学会誌が年2号化されました

今回、2010年度分までの会費を納入済みの方には、「青年心理学研究」の最新号を同封しております。今年度より学会誌は年2号化され、ナンバリングも「第23巻1号」となります。これまで以上に積極的な論文の投稿、または意見論文執筆のエントリーをお願いします。

なお、学会誌は本来でしたら当該年度分の会費を納入してくださった方にお送りするものです。すなわち2011年度の会費を納入いただいた方がその対象です。しかも当学会の年会費は前年度末までに収める規程になっており（会則13条）、すでに期限は過ぎています。ただし年2号化された初年度であること、期限から2カ月しか経過していないことを考慮して、第23巻1号に関しましては2011年度の会費のみを納入していない方にもお送りすることを、常任理事会で決めました。未納の会費がある方は、速やかに同封の振替用紙で納入くださいますよう、お願いします。

IV.学会誌機関購読取り扱い業者変更のお知らせ

学会業務の一部をイセブに委託することに伴い、これまで（株）丸善に委託してきた機関対象の「青年心理学研究」の販売・発送も、同じくイセブに委託することになりました。会員の先生方がおられる大学・研究所等で購読されているところも多くありますが、すでに業者変更、ならびに機関誌の年2号化についてのお知らせの文書を発送しました。学会の財政にとりまして、学会誌の機関購読は重要な収入源ですので、今後ともよろしくお願い致します。

IV.会費の納入状況のお知らせについて

昨年度より、タックシールに付記して会費の納入状況をお知らせしています。IIIにも書きました通り、すでに今年度会費の納入期限は過ぎておりますので、以下の説明とタックシールに付記した略号を照合されて、未納分のある方は速やかに納入をお願いします。なおこの記号は、6月3日時点のものをもとに作成しています。行き違いがございましたら、ご了承ください。

納入状況A：2011年度までの会費は完納ですので、納入の必要はありません。

納入状況B：2010年度までは完納ですので、2011年度分の納入が必要です。

納入状況C：2009年度までは完納ですので、2010～11年度の2年分をお願いします。

納入状況D：2008年度までは完納ですので、2009～11年度の3年分をお願いします。

納入状況D：（以下、未納の年数が1年分ずつ多いことを意味します）

入金の振替口座は「00970-0-125990」です。2009年度までの振替口座はもう使用できませんので、古い振替用紙は使わないようにお願いします。また「学生会員」（3,000円）と「一般会員」（5,000円）の区別に注意してください。大学院等に学籍がある方は、オーバードクターや研究生も含めて、「学生会員」（3,000円）となります。未納年が複数ある方で、途中からこの区分が移行した方は納入額にご注意ください。

★ ゆうちょ銀行以外の銀行からの振り込み先

店名：〇九九店 当座預金 口座番号：0125990

※この当座預金口座には、銀行のATMからも入金ができます。

※ゆうちょ銀行に口座を持っていて、「ゆうちょダイレクト」の登録★をしていればインターネット経由で入金できます（「ゆうちょダイレクト」からの振替は月5回まで手数料無料なので手軽&お得です）。

★http://www.jp-bank.japanpost.jp/direct/pc/what/dr_pc_wh_index.html

※会費を納めていませんと学会機関誌「青年心理学研究」は送付されません。遅れて納入された方への機関誌の送付は納入者が一定程度たまってからになりますので、2か月程度お待ちいただく可能性もございます。また、「青年心理学研究」への論文投稿や大会への発表エントリーも、当該年度までの年会費を納めていることが条件となります。

V. 会員異動

2011年1月26日以降、13名の方が入会されました（6月3日までに会費を納められた方です）。また、2010年度末をもちまして22名の方が退会されました。

2011年6月3日現在で会員は447名、うち名誉会員が5名となります。

※Web版では個人情報保護のため、お名前の掲載は控えさせていただきます。

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒520-0862 滋賀県大津市平津2丁目5-1
滋賀大学教育学部 若松研究室内
TEL & FAX : 077-537-7770
E-mail : seinenshinri@edu.shiga-u.ac.jp
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00970-0-125990
口座名称 : 日本青年心理学会
お問合せはできるだけE-mailでお願い致します。